

# 山里に響く、 くじらのオペラ

受け継がれながら姿を変える民話の行方

## 取材・文

石丸優希（一般社団法人日本海洋文化総合研究所）

## 協力

木村はる奈・近藤 圭(Trio99) | 黒澤 弘(小海町長)



四方が山に囲まれた長野県小海町には、『くじらの夫婦』という民話が伝わる。この民話は、このたびオペラ作品として上演された。地域のつながりやよりどころを育む、新たな試みをレポートしよう。

## 変わり続ける民話

民話の内容は、語り継がれる中で少しずつ変化する。長野県小海町に伝わる民話『くじらの夫婦』も同様だ。

かつて、越後の海に“くじらの夫婦”がいた。この夫婦は、信州の佐久にあるという「小海」で暮らそうと、千曲川をさかのぼった。しかし小海は海ではなく地名だと知り、再び越後の海に帰っていった—これが、語り継がれる大筋だ。

この民話は、文献に記録されるほか、アニメーション作品としても制作されている。作品によってそれぞれ少し違いがある。

昭和 33（1958）年発行の『信濃の民話』では、会話や心情が描かれ、昭和 48（1973）年発行の『小海町志』では、より簡潔にまとめられている。令和 3（2021）年、一般社団法人日本昔ばなし協会が制作したアニメーションでは、山の恵みが海を豊かにするというメッセージが加わり、「学び」の視点も盛り込まれた。

そして令和 7（2025）年 11 月、この物語は

オペラへと表現を広げた。オペラ創作ユニットトリオツナイン Trio99 が手がけた『くじらの夫婦』が、長野県小海町で初公演を迎えたのである。

## 体育館に広がる命と愛の物語

公演当日、会場である小海小学校の体育館には、多くの人が集まり、客席は満席だった。ステージ前には、オーケストラのスペースや雛壇を設け、中央には即席の花道も延びていた。本来のオペラ劇場のような、ステージ下に設ける“オーケストラピット”はない。しかし、こうした配置が会場の一体感を高めていた。

リンリン……というベルを合図に幕が開く。子を宿したくじらのおかみと夫が、生まれてくる子どもと豊かな海を守るため、我が物顔で大暴れするシャチと戦う力を求め、小海を目指す物語であった。

長野の自然を思わせる、壮大で心地良い音楽と共に、命や愛を主題に物語が進む。ステージ奥に設置したディスプレイに字幕と映像を映し出すことで、観客が物語のイメージを共有しやすい演出となっていた。

## 心を重ねられるオペラを目指して

Trio99 は、国立音楽大学の同期で結成された



くじらのおかみ(木村さん)と夫。「小海ボール」と呼ばれる球体が物語を紡ぐ鍵となる。写真提供:十川孝志



近藤さんが扮するシャチ。登場のたびに、堂々とした振る舞いと豪快さで会場を沸かせた。写真提供:十川孝志



出演した子どもたち。手にはそれぞれの「小海ボール」。中には自分の大切なものを入れている。写真提供:十川孝志



コンテンポラリーダンサーも登場し、全身で世界観を表現した。写真提供:十川孝志

ユニットである。ソプラノ歌手の木村はる奈さん、バリトン歌手であり演出も行う近藤圭さん、ピアノの吉田幸央さんの3人で、子どもも大人も楽しめるオペラを創作している。

令和元(2019)年に小海町で行ったコンサートをきっかけに、地元につながる『くじらの夫婦』を題材にした作品づくりが始まった。

脚本を担当した近藤さんは、「主人公の成長を描くことが大切です」と話す。観客は、川を上る目的や戦う相手との関わりを通じて、成長していく主人公に感情を重ねる。これにより、物語が自分ごととして心に残るのだ。

木村さんは、「オペラは、音楽そのものが極めて重要」と語る。古典が長く愛されるのも、音楽の力が大きいからだという。

本作では、地域の人にも親しみやすいオペラを、という思いから、身近に感じられるような音楽を生み出す作曲家・西下航平氏に依頼した。

## 共創が生む一体感

Trio99は、本プロジェクトの主体である小海町と連携しながらオペラ公演に向けて準備を進め、令和元年から複数回のコンサートやオペラ公

演を行ってきた。地元の人が気軽にオペラに触れられるよう、協賛による無料公開なども行い、回数を重ねるごとに認知が広がった。

令和6(2024)年のコンサートには、地元の子どもたちが合唱団として参加した。そして、今回の公演では、地域の合唱サークルや未経験者も出演するようになった。

こうしてさまざまな主体を巻き込み、町をあげて取り組む大きなプロジェクトとなった。

## 地域発のオペラが目指す未来

公演を終えて安堵した、と近藤さんと木村さんは言う。彼らはそこで満足することなく、この公演を通して生まれた物語や縁が、次にどこへ向かうのかを見据えている。

近藤さんは、「この物語は、越後の海の物語でもあります。次は新潟で、という使命感を感じています」と話す。

木村さんも「本公演を支えてくれた方が、東京にも多くいます。東京公演を行い、これまでのご縁に応えたい」と語った。

小海での上演をきっかけに、民話はオペラという新たな形として、次世代へと手渡されていく。🌀